

<h1>月報</h1>	<p>日本キリスト改革派  <b>横浜中央教会</b></p>	<p>8月号  2010年8月 日</p>
-------------	-------------------------------------	---------------------------

## 讃美歌雑感

N.K

讃美歌について感じていることを書きます。

・遭難して洞穴か小屋で救助を待つ数人の人たち。互いに励まし合いながら知っている歌を全部歌おうとするという話。子どものころどこで読んだのかまったく覚えていないのですが、この話が私の讃美歌の印象の深いところにあります。「讃美歌の歌詞を覚えておかなくちゃ」と思ったものです。

・デヴィッド・ボウイ扮するイギリス兵が日本軍の捕虜となり収容所で虐殺される。捕虜収容所の英兵、蘭兵たちは甲いの儀式をさせると要求するが、日本軍は認めない。その夜収容所宿舎から英兵・蘭兵の甲いの讃美歌が聞こえてくる。

これは大島渚監督の「戦場のメリークリスマス」でした。たしか私が大学生のころかな？ ビートたけしが印象的な日本人を演じていました。このときの讃美歌ははっきり覚えています。 The Lord's my shepherd , I'll not want （「主はわが牧者、われ乏しきことあらし…」） 詩編第 23 編にメロディーをつけた讃美歌で、欧米ではとてもポピュラーなものであるらしいです。（讃美歌第2編 41 番に収められています。）

・故人愛唱歌というものにあこがれた時期もありました。横浜英和が成美学園といっところ、そこに在籍していた私のいとこが急死しました。たしか高二であったかと思います。記念礼拝が学校のチャペルで行われ、私も参列しましたが、礼拝の中で彼女が愛していた讃美歌として歌われたのが「ナルドの壺ならねど …」讃美歌 391 番でした。その経験から、自分の「故人愛唱歌」は何にしようかと考えるようになりました。（今のところ 452 番かな？）

・クリスマスの讃美歌にはいい歌が多いと言われますよね？ 私もそう思いますが、秘かに私が注目しているのが聖餐式の讃美歌です。美しい曲がそろっています。讃美歌 203 番～207 番にいたる 5 曲は珠玉の讃美歌と言うべきではないでしょうか。ぜひ注目してほしいですね。

・讃美歌 21 については、どうしても曖昧な態度になってしまいます。と言いますのは、40 年にわたって親しんできた歌詞とメロディーは私の中にはしみついていますので、やはり新しいものには抵抗があります。（何せ遭難したら今まで覚えた讃美歌を歌い続ける予定ですから。）しかし、古い文語調の歌詞には全く感情が動かない世代は確実に増えていますから、いつまでも今の讃美歌でいいわけではありません。さて、どうしたものか…。

讃美歌についての雑感をとりとめなく書きました。以上です。

## サマーバイブルキャンプ 2010 に参加して

K.T

毎年恒例のバイブルキャンプは、8月4日から6日まで山中湖トーチベアラーズで行われました。私は、東部中会の教育委員として初めて参加させていただきました。中会主催のキャンプに参加するのは生れて初めてのことでしたので、この年になって多少緊張しました。キャンプには14の教会から4年生以上の小学生18名、中学生10名、高校生4名、合計32名(男:25名、女:7名)が参加し、活気のある3日間となりました。

今回のテーマは「イエス様と出会った人たち」と題して、開校礼拝から始まり、閉校礼拝まで首尾一貫してイエスキリストに焦点を当てた三日間でした。開校・閉校礼拝は鈴木牧雄牧師が説教をなさり、中高生科は立石章三牧師が講師として2回にわたってお話し下さいました。小学生科は浅野正紀牧師と千ヶ崎基牧師が担当して下さいました。私は中高生科に参加し、立石牧師の講演を中高生と一緒に聞きました。初日の講演では、イエス様が地上で出会った人たちを聖書から挙げ、くわしく解説がなされ、二日目は、実在した過去の偉人?達を紹介しながら、また御自分がイエス様と出会った経緯なども交えながら、救い主と出会った人たちがどのように生きていったかを解りやすくお話しになりました。

初めてキャンプに参加して強く思ったことは、子どもたちや青年たちには必要不可欠な行事なんだということです。この三日間は、自意識が強くなり思春期にも入る子どもたちが久しぶりの再会を喜び、同じ釜の飯を食べ、真剣に自分を振り返りながら聖書の教えに思いを寄せて、神様と自分のつながりを友達の思いも聞きながら考え、話す時間。そんな時を共に過ごすことが、なんと貴重なことか。その価値は計り知れないなと感じました。

日曜の礼拝も子どもたちには大切ですが、教会を離れて宿泊しながらの体験はかけがえのないものとなるでしょう。自分も子どものころに経験したかったなと思います。

もう一つ感心したことが有ります。三日間のプログラムを滞りなく行うために、メインになって働いてくれるボランティアの存在です。引率には牧師3名と長老2名が参加していましたが、実質動くのはボランティアの青年でした。東京恩寵のH.H君、湘南恩寵のS.IさんとY.R君、江古田のS.N君。チーフはH君でした。働き手の少ない人数の中、本当に身を粉にして動き、一生懸命後輩のために話し、盛り上がるように努力する姿は、守りに入っていた今の自分の身を奮い立たせてくれました。そういうボランティアを進んで引き受け、やりぬく青年の存在があつてこそ、貴重な体験のできるキャンプが成り立っているのだと実感しました。日々忙しい中でキャンプの計画をする先生方の働きと、メインになって支えているボランティアスタッフの働きに心から感謝したいと思いました。同時に、もっと多くのスタッフがいたらいいなと思いました。学生でも社会人でも、主にあつて生き生きとした姿を若い青年たちに見せることで、「僕もあんなお兄さんになりたい」「あんなお姉さんになりたい」と憧れるのでしょう。彼らには輝きがあるからです。